

第8章

「社会を見る目」を鍛えよう！（奥井亜紗子）

1 「社会の現実」を知ること

大学に入学したばかりの読者にとって、「社会調査」とはあまりなじみのない言葉かもしれない。オリエンテーションで配布されるアンケートも調査であり、雑誌の芸能人のインタビュー特集なども広義には調査であるが、「社会調査」といった場合はどのような意味をもつのだろうか。「社会調査」とは、「社会がどのようなになっているのか」という社会の現実を、客観的なデータに基づいて明らかにすることをさす。世の中にはインチキな調査データが星の数ほど溢れているが、正しい調査手法に基づいたデータを適切に読み解くことは、社会の現実を正確に把握するうえで非常に重要である。実際、私たちは社会の現実を「分かったつもり」になって生きていることが多い。一例を挙げてみよう。読者の皆さんはこの春から晴れて大学生になったわけであるが、現在の日本の大学進学率は何パーセント位だろうか。

ここでは皆さんが入学した四年制大学の進学率をみてみよう。大学進学率とは18歳人口^{*1}に対する大学入学者数の割合をみたものである。本稿執筆時点で最新2019年3月時点での大学（学部）進学率は53.7%、女子に限定した大学進学率は50.7%である。つまり、大まかなイメージでいうと高校卒業した者のうち大学に進学する者はおよそ半分である。

この「50.7%」を皆さんはどう見るだろうか。思っていたより少ない、と感じた人も多いであろうし、その一方で、意外と多いな、と思った人もいよう。この肌感覚の違いは、皆さんの出身高校がいわゆる「進学校」だったかそうでないか、あるいはご両親やきょうだい親戚のなかで大学に進学した人が多いか少ないか、というあなたがこれまで生きてきた環境によって異なってくる。中学から高校に進学するのと同じ位の「当たり前」な感覚で大学生をしている人もいれば、相応の意志と覚悟をもって今この場所にきている人もいるのである。

社会の現実を知るのは思ったよりも難しい。というのは、私たちは日頃、自分が世界の中心にいて自分の立っている場所から見た風景を「社会」だと思って生きているからである（図1①）。GoogleのStreet Viewをイメージしてみよう。Google Street Viewでは特定の地点から見た360度が映し出されるが、私達が日頃見ている世界とはこのようなものである。しかし、カメラが映した画像だけをみても、地図がなければそこがどこなのかは分からない。あなたがもし「え？2人に1人しか大学に進学していないの？（7~8割位は進学しているのじゃないの？——実は講義中に学生に聞くと、

*1 3年前の中学校卒業生及び中東教育学校前期課程修了者をさす。

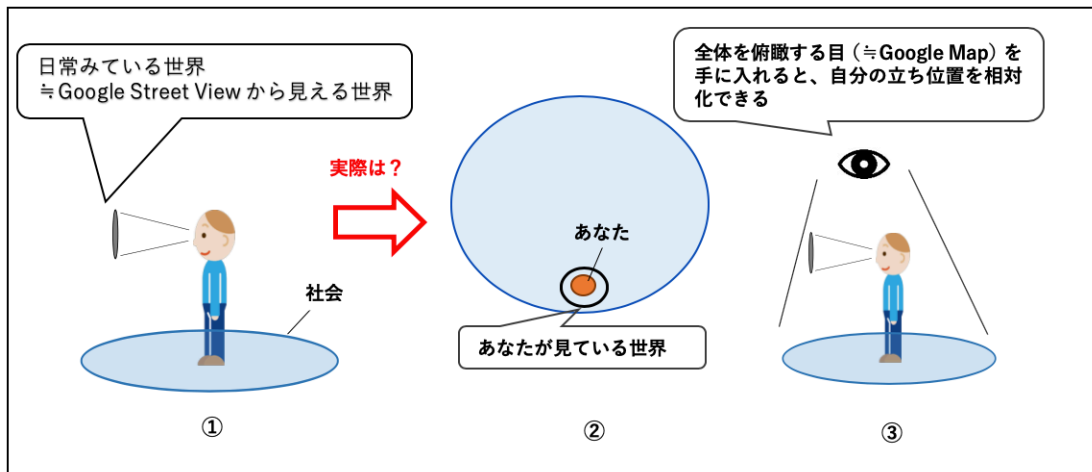


図1 社会の現実を知ること

大抵こういう答えが返ってくる)」と考えたならば、それは、あなたがこの社会においてたまたま、あるいは諸事恵まれた結果としてそのような場所（大学進学は当然だと思ふような場所）にいるということである（図1②）。

Google Street View の例でいうならば、社会の現実を知ることとは、いわば Google Map を手に入れることに他ならない。私たちは「地図（社会の現実）」を手に入れて初めて、社会全体を俯瞰する目を持って「今自分がどこにいるのか」という社会の中自分の立ち位置を知る（相対化する）ことができるのである（図1③）。

【課題】

あなたが「当たり前」だと思っていたことが実は違う（単なる「思い込み」だった）ということに気づいた経験について話し合ってみよう。

- (1) その「思い込み」は、あなたのどういった環境から生じたと考えられるだろうか。
- (2) 自分の「思い込み」を気づいたきっかけは何だろうか。

（例）男性は家事ができないものだと思っていた。

〈環境〉自分の父親や兄が一切家事をしなかったから。

〈きっかけ〉友達の家遊びに行って友達のお父さんが皿洗いをしているのを見たこと。

2 既存の統計データを確認しよう

(1) 官庁統計の活用

広く捉えるならば、大学での学びはすべからく「地図」を手に入れるための営為であるといえるが、そのなかで、社会調査とは、「社会的な問題意識に基づいてデータを収集し、収集したデータを使って社会について考え、その結果を公表する」までの一連のプロセスを包含している（大谷・木下ほか編 2013：7）。

「社会の現実」を知る第一歩は「探求すべき何か」の現状を客観的に把握することから始まる。社会に関して知りたいキーワードをネットで検索するとヒット件数は無数にあるが、間違っても上位に

あがった記事を適当にクリックしてそこからグラフなどを引っ張ってこないようにしましょう。「まとも」な記事には必ず出典が書かれている。そして、社会に関するキーワードに関する統計データは、官庁統計を出典としていることが少なくない。上述した大学進学率に関していえば、文部科学省が毎年実施している「学校基本統計」を確認することになる*2。

国や自治体は様々な統計調査（官庁統計）を実施している。なかでも特に重要なものとして「統計法」によって定められたものは「基幹統計」と呼ばれ、「学校基本統計」や、5年に一度全世界帯を対象に実施される「国勢調査」をはじめとして、計53種類（2019年5月24日現在）の調査が指定されている。官庁統計は近年様々な統計不正問題が噴出して信頼性が揺らいでいるが、それでも、一般の民間統計に比較すれば概して調査概要が詳しく記されており統計処理も適切であると考えられるため、相対的にはまだ信頼度が高いといえる。現在、政府の統計データは総務省統計局が管理運営するHP「政府統計の総合窓口 e-Stat」で公開されており、皆さんのパソコンから直接元のデータまで確認することが可能である。既存データを探す際には、まず官庁統計等の元データをあたる習慣をつけておくとよいだろう。

(2) 推移にも目配りをしよう

さて、既存の統計データにあたる際に心がけたいのは、現状だけではなく推移——歴史的にどのように変化してきたか——も確認しておく、ということである。先ほど女子の大学進学率 50.3% という数値を思ったより低いと思った人も少なくないであろうが、そもそも4年制大学に進学する女子が半数を超えたのは2018年が日本の史上初のことである。

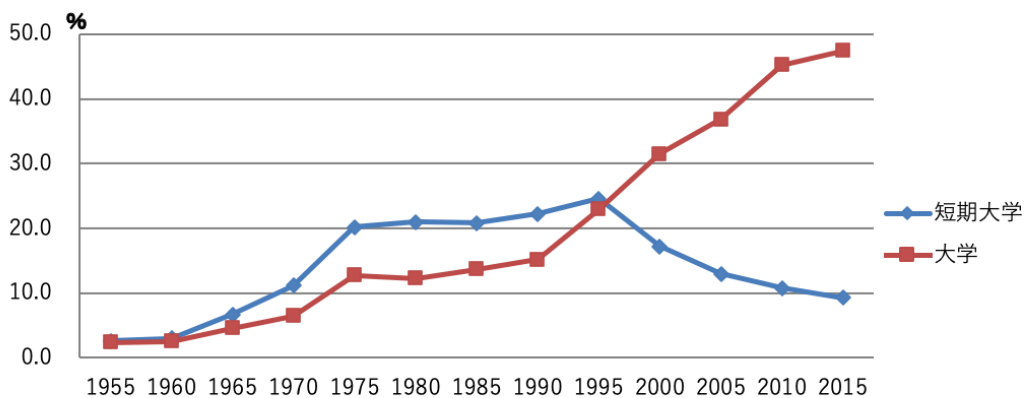


図2 女子の大学進学率の推移（出典：文部科学省『学校基本調査』各年度より筆者作成）

女子の大学進学率の長期的な推移をみたのが図2である。推移のグラフを読むのが苦手な場合は、それぞれの時代の具体的なイメージを膨らませることが有効である。ここでは、あなたの母親、あなたの祖母がそれぞれ18歳だった年に縦線を引いてみよう。母親の時代、祖母の時代に大学に進学した女子の割合はどの程度だっただろうか。機会があれば、母親や祖母に対して、当時女子が大学に進学することは世間的にどのようなイメージだったかを尋ねてみるのもよいだろう。

*2 旧「学校基本調査」。平成26年11月19日付で「学校基本統計」に名称変更された。

図2をみると、1955年時点ではほんの数%だった進学率は高度成長期を通じて上昇するが、その主流は大学ではなく短期大学だったことが分かる。1975年から1990年にかけては短大進学率約20%、大学進学率12~14%という時期が続くが、同時期の男子の大学進学率は30%台半ばから40%を推移しており、進学するならば「女子は短大、男子は大学」という構造が成立していた。女子の大学進学率が急激に増加し始めたのは1990年代以降であり、2000年に31.5%と3割を突破し、その後も破竹の勢いで伸びた結果の現在の、ようやくの半数超えなのである。このように歴史的推移をみることによって、50.7%という数値を単に感覚的に「高い」「低い」と評価するのではなく、一定の歴史的背景のもとにある数字として意味づけてみるができる。

【課題】

(1) 話し合ってみよう。

1. なぜ「女子は短大、男子は大学」という構造があったのだろうか。
2. 1990年代以降、その構造が崩れたのはどのような要因があったのだろうか。

(2) 調べてみよう。

- 1955-2015年までの男子の大学進学率を調べて、図に書き込んでみよう。

3 観察をしてみよう

大学進学率は「社会の現実」の一つの例であるが、あなたがレポートや卒業論文を書くにあたっては、あなたが調べるべき「社会の現実」は何か、つまりあなたにとっての「探求すべきもの」は何か、ということからスタートすることになる。大学での学びと高校までの勉強の最も大きな違いは、この「探求すべき何か」を自分自身で見つけ出さなければならない点であろう。しかし、卒論指導をする大学教員が近年共通して抱える悩みの一つに、「自分が何をテーマにしたらいいかわからない」という「迷える子羊」の大量発生がある。テーマとは「探求すべき何か」であり、専門分野によって入口は様々であるが、こと社会学的な「探求すべき何か」に関していうならば、それを容易に見つけられるか否かは、自分を取り巻く人々や社会に対して常日頃からいかに関心を向けているか、ということにかかってくる。

例えば、あなたは日頃、電車やバスの中で何をしているだろう。多く人はスマホの画面を見ることに費やしているのではないだろうか。スマホがもたらす情報量は膨大である。その情報は「あなたが欲しい」情報がピックアップされているがゆえに効率的で有難いのであるが、その反面あなたがさほど欲しくない情報は無意識のうちに、しかも徹底して遮断されていることになる。これでは社会に対する関心を醸成することは難しいだろう。一度スマホの画面から顔をあげて、電車に乗り合わせた人を観察してみよう（ただし、ジロジロみてはいけない）。

以下は、ある晩9時過ぎにAさんがJR京都駅から大阪方面の快速で乗り合わせた男性の観察から演習ゼミ生全員で想像力を膨らませたケースである。

京都駅からAさんと同じBox席に乗り合わせたサラリーマン風の男性は、年齢は30代後半位である。スーツは皺が付いており、少し疲れた空気を身にまとっている。席に座るやいなやスマホを取りだして戦闘ゲームらしきものをはじめ、同時にコンビニの袋から発泡酒を出して飲み始めた。発泡酒の缶を持つ左手薬指の指輪をみると既婚者のようである。

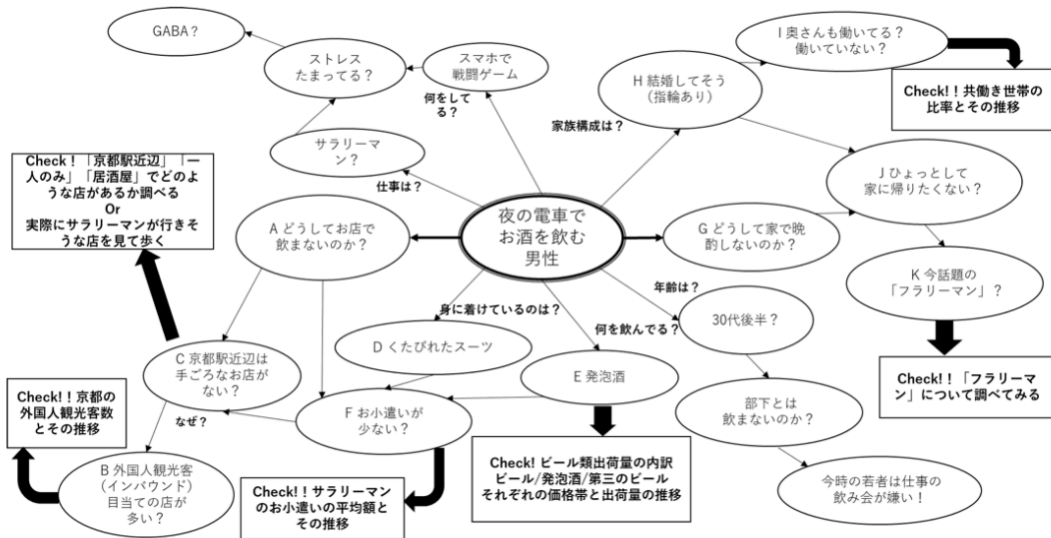
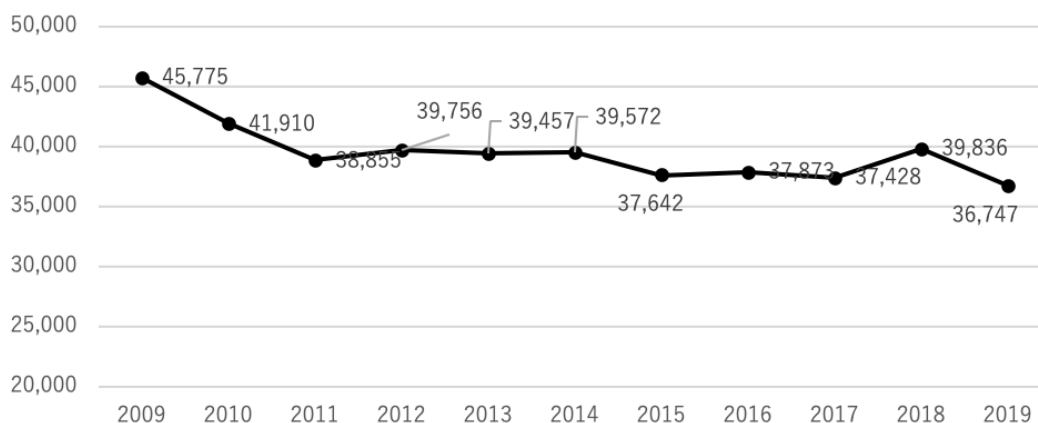


図3 「夜の電車でお酒を飲む男性」の観察から想像力を膨らませた例

この一人の男性の姿から想像を膨らませてみよう。彼はなぜ電車の中でお酒を飲んでいるのだろうか。図3『夜の電車でお酒を飲む男性』の観察から想像力を膨らませた例のように、想像した内容を矢印でつなぎながら書いてみると、1人の人間観察からでも様々な想像を広げる余地があることが分かる。ここでの想像は正しいか正しくないか、ということは重要ではなく、どれだけ連想ゲームを続けることができるか、図内の丸をどれだけ沢山作ることができるか、ということがポイントである。「電車でお酒を飲むなんてマナーが悪い!」という批判的コメントは一旦横に置いて、目の前の彼をもとに想像（妄想）とも言う）の翼を広げてみよう。あくまで想像なので、多少の失礼にも目をつぶることとする。まず、どうしてお店で飲まないのだろうか(A)、という方向で考えてみよう。例えば京都駅周辺だと最近はインバウンドで外国人観光客を対象とした店が多く(B)、彼のように一杯飲んで帰りたいサラリーマンに手ごろなお店がないのかもしれない(C)。くたびれたスーツ(D)を身に着けて発泡酒(E)を飲んでいるところを見ると、お小遣いが少ないのかもしれない(F)。では、実際にサラリーマンのお小遣いはいくらくらいなのだろうか。新生銀行が実施している「サラリーマンお小遣い調査」より、男性会社員の平均お小遣い額の推移をみてみよう*3。前述図2同様、時系列データをグラフ化する場合は、図4「男性会社員の平均お小遣い額」のように折れ線グラフを用いることが一般的である。

*3 新生銀行が2019年4月に全国の会社員、パート、アルバイトを対象に実施したWEB調査。サンプル数2717名（うち男性1252名）。



注：「2019年サラリーマンのお小遣い調査詳細レポート」6頁図をもとに筆者作成。

図4 男性社員の平均お小遣い額（円）

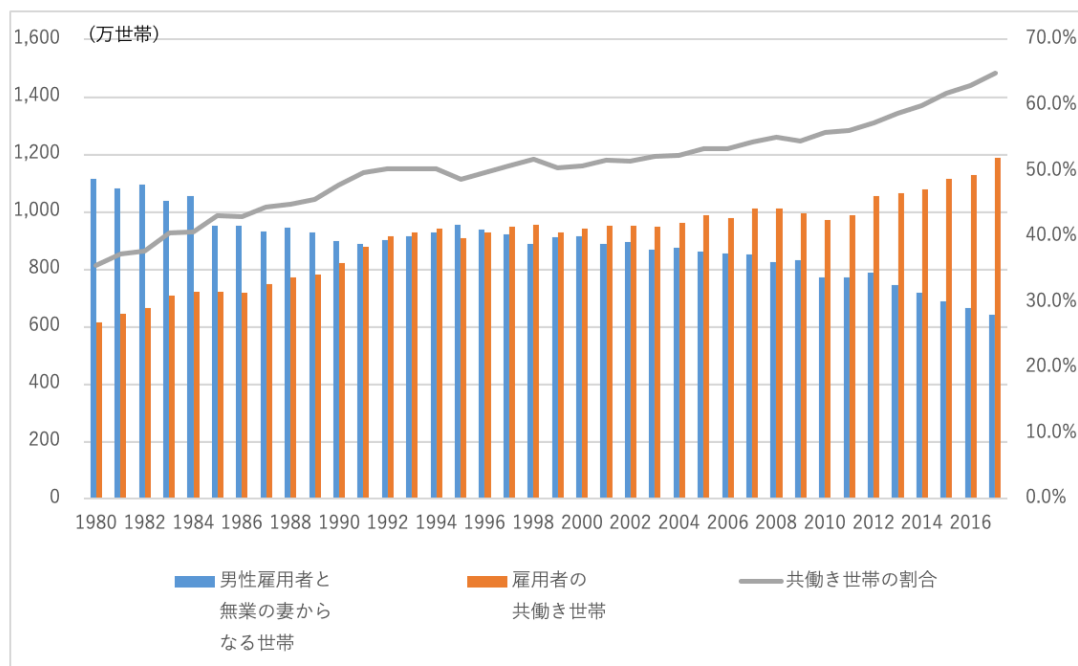
図4によると、2019年の男性社員の平均お小遣い額は36,747円であり、2009年の45,775円から10年間で約9000円も減少していることが分かる。調査が始まった1979年からみると、バブル経済末期である1990年のお小遣い額は77,725円と最高額を記録しており、そこから比較すると実に半分以下になっているのである。

では京都駅近辺で飲んで帰ろうと思うとどれくらいお金がかかるだろうか。これは、実際に駅近辺を歩いてサラリーマンの行きそうな居酒屋の相場を見てもいいだろう。「京都駅近辺」「居酒屋」「一人飲み」などのキーワードを入れてネットで検索してみてもいい。サラリーマンが何度か飲んだらあつという間にお小遣いが尽きてしまうことが分かるだろう。このように、実際に「探求すべき何か」の現場に自分の身を置いてみることを「フィールド・ワーク」と呼ぶ。

前述のお小遣い調査によると、男性社員の一か月の飲み代平均は13,175円、一か月の昼食代は555円であり、30代男性社員の32.9%がお小遣いをやりくりする方法として「外で飲む回数を減らす」と回答していた。夜の電車でお酒を飲むくたびれたサラリーマンという眉をひそめなくなる光景の背後には、ひょっとしてこのような切ないサラリーマンの懐事情があるのかもしれない。

次に、どうして家で晩酌をしないのだろうか（G）という方向で考えてみよう。昭和時代のテレビドラマには仕事から帰った夫を労い甲斐甲斐しく世話を焼く——必要とあれば晩酌の準備もする——妻の姿が描かれることも少なくなかったが、これは働いていない専業主婦の妻を前提とした風景であった。男性は既婚者のようであるが（H）、妻の就業状況はどうだろうか（I）。

図5「共働き等世帯数と共働き世帯の割合の推移」は、雇用者世帯の共働き等の世帯数と共働き世帯の割合の推移をみたものである。このように、一つのグラフの中に棒グラフと折れ線グラフという異なる形態のグラフがあるものを複合グラフと呼ぶ。複合グラフは左右に異なる軸目盛が付されており、どの形態のグラフをどちらの軸で見るか注意が必要である。このグラフでは、棒グラフが左側、折れ線グラフが右側の目盛りになる。



注1：『厚生労働白書』平成30年度版図表1-1-3をもとに筆者作成。

注2：「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」とは夫が非農林業雇用者で妻が非就業者（いわゆる専業主婦世帯）、「雇用者の共働き世帯」とは夫婦ともに非農林業雇用者の世帯を示す。

注3：2010年及び2011年は岩手県、宮城県、福島県を除く全国の結果。

図5 共働き等世帯数と共働き世帯の割合の推移

図5をみると、1980年には約600万世帯であった共働き世帯は2017年には倍増して1200万世帯近くまで達しており、逆に男性雇用者と無業の妻からなる世帯、いわゆる専業主婦世帯は約1150万世帯から600万世帯強まで減少している。2017年現在の共働き世帯の割合は65.0%であり、専業主婦が自身の性別役割の一環として当たり前のように「夫のお世話」をする風景は今や少数派であると考えられよう。

ひょっとして家に帰りたくないのでは（J）という可能性を考えてみる。近年は「働き方改革」として、国を挙げて長時間労働を規制する方向性が打ち出されている。しかし、その一方で定時に仕事が終わっても家に居場所がない、家事育児をやりたくないという理由でまっすぐ家に帰らないサラリーマンが「フラリーマン」と名付けられ社会的にバッシングされている（K）。

図には他にも色々な想像が広がっており、もちろんここに書かれている以外にも展開の余地があるだろう。このように、「夜の電車の中でお酒を飲む男性」たった1人の観察を通してでも、京都のインバウンドからサラリーマンのお小遣い事情、共働き世帯の増加から「フラリーマン」まで、様々な社会の現実を有機的に関連させて想像力を働かすことができる。それらの社会の現実（「探求すべき何か」）が実際のところどうなっているのか、ということを明らかにするためにまず既存の統計データや先行研究を確認し、そして既存のデータや先行研究がなかったり、あるいはそこからさらに分析を深めていこうとしたりする場合に、自分自身でデータを収集する——社会調査を実施することが必要になってくる。

【課題】

通学電車等で見かけた人を観察して、そこからどのような社会の現実を連想しうるかを話し合いながら図を書いてみよう。

4 おわりに

本章では、社会調査によって明らかにする「社会の現実」とは何か、皆さんにとって探求すべき社会の現実をどのように見つけ出すか、という観点から話を進めてきた。社会調査はアンケートやインタビューの単なるスキルを身に付ければよいというものではない。自分を取り巻く現代社会において、何を課題として設定するかという皆さんの問題意識と分ち難く結びついているため、問題関心がなければ社会調査のスタート地点には立てないのである。

アメリカの社会学者のP・バーガーは、社会学者について「アカデミックな肩書がなければ、ゴシップに熱中してしまうに違いない人物であり、鍵穴をのぞき、他人の手紙を読み、引き出しをあけようと心をそそられてしまう人物に過ぎない」と表現している（P. バーガー, 1963=1979:31）。字義通りにみると社会学者とはなかなかの「やばい人」のようであるが、人間に対する飽くなき好奇心——それが高尚なものであれ、下世話なものであれ——は、皆さんがこれから生きていく社会の現実深く迫る上で、不可欠なモチベーションとなるであろう。

引用・参考文献

- 大谷信介・木下栄二他編（2013）『新・社会調査へのアプローチ 論理と方法』ミネルヴァ書房
- Berger, P. L. (1963) *Invitation to Sociology*, Doubleday & Company Inc. (水野節夫・村山研一訳、『社会学への招待』思索社, 1979年)
- 新生銀行グループ「ニュースリリース」<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000024.000005652.html>（2019年12月29日最終閲覧）